随想

戦後七〇年に誓う

神野　雄二

本年は戦後七〇年、広島・長崎への原爆投下七〇年の節目の年である。それに因む作品を何としても書き残したい。どこか岩肌に刻みたいとさえ思う。そう言えば、今住んでいる熊本は、装飾古墳が多く存在する（『黄泉の国の彩り』常設展示図録、熊本県立装飾古墳館発行、二〇〇九年三月）。装飾古墳とは、古墳の石室、石棺、横穴墓の壁面に彩色・浮彫・線刻を施したものである。四世紀頃から七世紀にかけて九州北部を中心に広がった。全国に六五〇基ほど存在し、熊本県内に二〇〇基近くある。山鹿市には装飾古墳館がある。一九七三年八月、家内と、山鹿市の「チブサン古墳」を見た。同心円紋と三角文の組み合わせに、赤・白・黒の彩色がされており、実に美しい不思議な世界だった。古墳館は体に電流が走るほど感動した。岩肌に刻み込まれた幾何学文様に宇宙の神秘さえ見た。

私は刻線に得も言われぬ魅力を感じる。たとえば、刻符・甲骨文・楔型文字・フランスの彫刻家ユーバック作品など。道路のアスファルトの鰐割れにさえも。

私の作品制作の原点は「刻む、刻す」ことに在る。今年何としても、かつて購入しておいた欅の板に何かを刻み込み始めたい。これは、私が死ぬまで刻み続ける。何を刻むか。

以下『千書万香』（第二五・二六号他、美術新聞社、二〇一五年九・一一月）に書いた文に補足修正する。

本年は戦後七〇年、広島・長崎への原爆投下七〇年の節目の年である。それに因む作品も各分野で数多く発表されることだろう。書の世界も、会派や立場を超えて、これに因んだ『書作品集二〇一五―戦後七〇年』といったものを出せないものか、今年しかやれない作品集をと、切に思う。戦争世代の方々が高齢となって亡くなっていく昨今、平和の尊さを語り継ぐ責任は大きい。次の世代に、書を通して何を伝えていくかを本気で考えたい。

天皇陛下は、日本人が記憶に留めるべき年月を四つ挙げられた。1945623・194586（815）・194589（112）・1945815である。私はこの四つの年月日（時間）を書として書き続けたく決意している（図1）。一数字ごと、命に刻み付けたい。これまで多くの被爆者、ハンセン病・水俣病・福島原発の関係者にお会いしてきた。熊本の菊池恵楓園の「菊池恵楓園ボランティアガイド」の資格を取得した。また恵楓園入所者自治会会長志村康氏や、詩人・ハンセン病訴訟全国原告団協議会長谺雄二氏（二〇一四年五月一一日死去）と幾許かの交流を持った。一様に話されたことは、真実を知ってほしいということと、後世へ伝えてほしい、の二点であった。

本年「戦後七〇年平和と人権シンポジウム」（基調講演五木寛之

氏による「戦争の記憶」・「熊本人の戦争体験」）（八・二四、市民会館崇城大学ホール）、「五校と戦争」（八・六～一二・二一）（熊本大学五校記念館）を拝聴・参観した。

今熊本には、作家の石牟礼道子先生（八八歳、『苦海浄土』）と、版画・彫刻家の浜田知明先生（九七歳）がおられる。平和と人権による、世界に通用する本物の芸術家である。お近づきを得られた事に感謝したい。石牟礼道子先生の「石牟礼道子の音楽石牟礼道子の文学、歌う」（五・一〇）（熊本・早川倉庫）、石牟礼大学（一一・一五）（Denkikan）、浜田知明先生の「戦後七〇年記念浜田知明のすべて」（八・一～九・一三）（熊本県立美術館）（水俣展サポーター会議キックオフ講演会、森達也・緒方正人、二〇一六・一・一〇、市民会館崇城大学ホール）を拝聴・参観した。

私は、平成二七年度全国大学書道学会書作展の出品作品の「戦争I」で、「まだ戦争は続いている」と書いた。第三一回国際蘭亭筆会書法展に「平和への祈り」シリーズ「1945623194 5868151945891121945815」を出品した。また尚絅大学第三五回卒業書作展（熊本県立美術館分館）に油書「広島・長崎」を出品した。本年、今しか書けない作品を残したい思いからである。

私は、「歴史数字書」という主題ある書作を、一九八八年（三四歳）から行ってきた。「歴史数字書」とは、歴史的に重大、また印象深い出来事・事象が発生した年月・日時の数字そのものを素材にして表現した作品である。絶対的平和へのメッセージである。祈りの書である。美しい美術としての書とともに、「平和・人権の書」があってもよいだろう。書とは、線（神線）であり、形（心形）であり、気韻（書魂）である。制作では気韻生動を最も重んじ、篆刻は「天刻」と考えている。

これまで、「広島・長崎・沖縄」シリーズ、「神線作品―甲骨文による―」シリーズ、「書?」シリーズ、「○□」シリーズ、油書などを制作してきた。今後は「平和への祈り」シリーズ「1945623194586815194589112194581 5」を書いていきたい。歴史数字書、油書（O・K、オイルカリグラフィ）、板書、ムービングシール（M・S、動く篆刻）、「非文字篆刻」などは、先に刊行した『神野大光の世界―書・篆刻作品集―』（二〇一三年、創想舎）を見ていただけると有難い。『書写書道教育論考』（二〇一五年、創想舎）に作品の補遺を掲載した。

これまで書を芸術・教育・学術の面から捉え、熊本市現代美術館での個展（1）と前掲著二冊の出版を終えた。書籍は国立国会図書館を始め全国の大学や研究機関に寄贈させて頂いた。残すは、ライフワーク『日本印人研究』である。何としてもやりとげたい。

次に、一九五四年に太平洋ビキニ環礁でアメリカが水爆実験を行い、近くにいた第五福竜丸が被爆した。いわゆるビキニ事件である。その元乗組員の大石又七氏に、二〇一五年六月一二日、お会いして懇談した（図2）。氏は毅然と核の怖さと平和の尊さを

訴えられた。大石氏の談話のいくつかを掲載する。生きた未来への教訓である。

・ビキニの経験から、本当の核兵器の怖さを伝えたい。これは私の義務です。

・歴史は知らされない部分に怖さがある。

・私の講演に対する子供たちの感想文に、真実が読み取れる。残してあげたい。

面会に先立って、質問事項をメモにしてお送りしていた。ご丁寧にお譲様田中好子様を通し、お答え下さった。私からの質問は、以下①～⑤であった。

質問（平成二七年五月六日）

① 被爆のことを長く沈黙されていたにもかかわらず、問題を訴えられた理由。

② 第五福竜丸事件を今後どのように伝えたいか。

③ 被爆体験を語り、核廃絶を訴えられる活動を進めるに当たり、最も悲しかったことと、最も嬉しかったこと。

④ 福島の原発事故をどう思われますか。

⑤ 若き青年たちに伝え遺したい思い。

回答（平成二七年五月二八日）

① ビキニ事件は戦争が終わって九年後、放射能についてはまだ何も分かっていない昭和二九年の出来事です。放射能は眼に見えるものではなく、臭いもなく、第五福竜丸の乗組員達は放射能による内部被爆がどういうもので、どんなことが起こるのかなど知る由もありませんでした。病気がうつるなどという噂や、偏見、差別などもあり、私はそこから逃れたい一心で、誰も知らない人混みの中に身を隠すことを考え、東京に出たのです。それから数十年、事件は世間から忘れ去られて行きました。しかし、気が付くと仲間の乗組員たちは一人またひとりと働き盛りの四〇代五〇代で命を落とし、私も第一子は奇形児で死産、そして仲間たちと同じように癌になり、肝臓ガンの手術を受けました。この頃から私の思いは変わりました。アメリカの内部資料からビキニ事件の内容が明らかになりました。アメリカは敗戦国の日本に圧力をかけ、日本政府は見舞金というかたちで事件を決着させ、裏では原子力技術と原子炉導入の取引を行い、そのことを隠したのです。私は自分達がいかに軽視され、見捨てられたかを知りました。そして、当事者が声を上げなければこの事件は何事もなかったかのように消されてしまうのではないかと思うようになったのです。

② ビキニ事件は現在起こっている福島原発事故と同じもので、前例として考えるべきです。

ビキニ事件もまだ終わっていません。多くの人が内部被爆に苦しんでいます。海や土地は汚染され、マーシャルでは六〇年経っても住み慣れた島に戻れずにいます。生活の糧を失くしコミュニティは分断され、家族さえもばらばらになり、今だ補償問

題も解決していません。福島ではどうなってしまうのでしょう。

原爆と原発は同じです。日本に原子力発電所が五三基あるということは原爆が五三発置かれているということです。処理できず、消すことが出来ない放射性物質を持つ炉を、何百年何千年も子孫に残さなければならないことは無責任極まりないと思います。「トイレのないマンション」です。

③ マーシャルも福島も、先祖代々受け継がれてきた大切な土地や家、そして思い出も全て捨てなければならない辛さを思う時。最も嬉しかったことは、講演後の子供たちの感想文です。

④ そら見たことか、と思っています。

ビキニ事件当時、原発導入には反対する学者や一般の人も大勢いました。しかし、それを押しのけて強引に国会を通した政治家や経済界の人達は、今、表に出ることもなく責任を取ることもしていません。その人達が罰せられなければ同じことがまた起こるでしょうし、刑法の意味がなくなります。

⑤ 国が教える常識は時代によって変わることを知っておくこと。歴史は正確に伝え、考え、学ばないと、悪しき習慣の繰り返しになってしまうと思います。

大石氏の著作は多いが『ビキニ事件の真実』（みすず書房、二〇〇三年）で述べられた「俺の中のビキニ事件はまだ終わっていない」は、胸を打つ。大石氏にはいつまでもお元気で、真実を語り続けてほしいと願う。

さて、私たち書の表現者はいったい今何をすればよいか。歴史の審判に浮ついた、マヤカシの芸術では、通用しまい。二番煎じは二番煎じである。芸術は創始者しか残らない。物真似の似非芸術家は必ず滅びる。

まずは、自分に正直であるべきだろう。ここから一歩は始まる。まだ遅くはない。このことを若い青年達に何としても言い残しておきたい。

さて、繰り返しになるが、私は芸術、書道の歴史研究と作品制作を専門としている。これまで制作のテーマとして、「広島・長崎シリーズ」「広島・長崎・沖縄」と「ニューヨークテロ9・11」を取り上げてきた。エポックとなる年月日を書として制作する。たとえば、「19458681 5・19458911 2・19456 23」である。これは私にとって平和への祈りである。

私は以前広島に三年間住んでいた。大学の同僚教員に被爆された森下弘先生(2)がおられ、原爆が身近なものとして思われた。広島では、原爆投下の日、八月九日八時一五分に、サイレンがならされ黙祷をささげる。市内に広島赤十字・原爆病院など原爆に関連した施設があり、広島は確かに他の都市と何かが違っていた。

昨年、広島市原爆資料館で被爆者の体験を拝聴した。平和公園をくまなく歩き、写真に五〇〇枚収めた。原爆投下された時間にその真下に行き空を眺め、今は平和であるが、あの日あの時間に何が起こったのか、と自問自答した。

また広島でどうしてもお会いしたい方がいた。それは、原爆を題材とした漫画『はだしのゲン』で知られる漫画家中沢啓治先生（二〇一二年一二月一九日没）だった。先生は体調を崩され入院されていた。数日前にはご退院されたと聞いていたが、当日病院から抜け出して会って下さったと、後に奥様から伺った。中沢先生は、はだしのゲンについて、平和について朗々と話された。凄まじいばかりの口調で語られた。もっと広島市民は、日本国民は怒れと、時に強烈なお考えを披露された。最後に二人の意見が一致したことは、「戦争は二度と起してはいけない」ということと、「対話の重要性」だった。

長崎は、私の学術研究のテーマが長崎出身の篆刻家を扱っていることもあり、熊本大学に赴任する前からよく訪ねた。長崎平和公園、長崎原爆資料館に行き、北村西望作平和祈念像など飽かず眺めた。

沖縄も何度となく訪れ、ひめゆり平和祈念資料館・ひめゆりの塔や、宜野湾市にある佐喜眞美術館に行った。美術館は米軍普天間基地に隣接しており空軍の軍用機が離着陸していた。館長は生憎不在だったが、館長夫人から館内の案内を受けた。平和を祈願している館長の意思といえる「生と死」「苦悩と救済」「人間と戦争」が反映した施設と感じた。

「広島・長崎・沖縄」の三都は、日本人が、いや世界の人が忘れてはならない都市である。

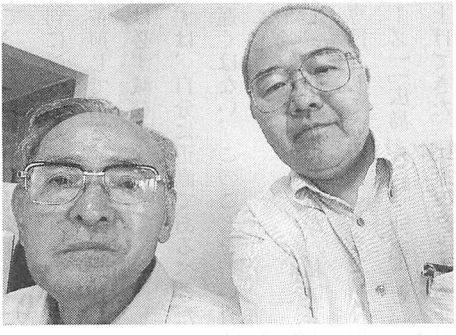
まずは、自分ができる事、足下の事にとりかかりたい。平和・文化・教育運動を推進するために、市民社会のネットワークを広げていくことも必要であろう。まず一歩を踏み出す勇気を持つことだ。微力ではあるが、私の専門の芸術である書を通じて、平和活動を展開したいと念願している。

注

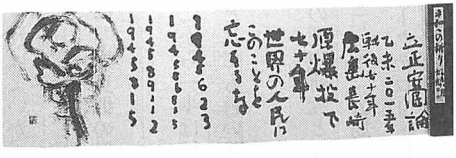
（1）神野大光展　―書と篆刻の世界―
会期・二〇一三年五月一一日（土）～七月六日（土）、会場・熊本市現代美術館　ギャラリーⅢ（熊本県熊本市中央区上通町二の三　びぷれす熊日会館三階）（個展出品作品一七点が収蔵される。）

（2）森下弘（一九三〇年広島生まれ、広島原爆被爆）
島根大学・広島文教女子大学元教授、毎日書道展審査会員

（じんの・ゆうじ　熊本大学教育学部教授）



図版１　大石又七氏と筆者（2015. 6. 12）



図版２　「平和への祈り」シリーズ・2015